



Data 2025-4

監督: 彭偉 (ポン・ウェイ)

出演: 雪雯 (シュエ・ウェン) / 管
 韵蓁 (ゼン・ユンゼン) /
 陳昊明 (チェン・ハオミン)
 / 楊涵斌 (ヤン・ハンビン)
 / 王亜軍 (ワン・ヤージュン)
 / 孫序博 (スン・シューボー)
 / 劉冠誼 (リウ・グワンイー)
 / 王馳 (ワン・チー) / 牟玫
 萱 (ムー・ウェンシュエン)
 / 石榴 (シー・リウ)

👁️👁️ みどころ

日本では昔から、「一姫二太郎」（「1人の女の子に2人の男の子」ではなく、「1番目が女の子で2番目が男の子」の意味）が理想とされてきたが、1980年頃に「一人っ子政策」を採用し、2015年にそれを撤廃した中国では？日本でも韓国でも中国でも、昔から男尊女卑の思想が強いが、一人っ子政策が強調されると、1番目の女の子は養女に出されてしまうことに。

日本大学芸術学部映画学科で学んだ1984年生れの彭偉（ポン・ウェイ）は、日中で共同制作した初監督作品のテーマを“家族”と設定し、『夏來冬往』というタイトルに。

舞台は青島。風光明媚で青島ビールのおいしい青島は大人気の近代都市だと思っていたが、山上の鄭家の地域にはさまざまな因習が！「親が子を育て、暮らしを営む。その子が新たに生まれる子を育て、世代が移っていく。それはまるで四季のように。夏が来て冬が来る。冬が去るとやがてまた夏が来る。」わけだが、本作にみる2人の養女を中心とする、家族たちの再会と別れは？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ 日大卒の彭偉の長編初監督作品は日中共同制作で！ ■□■

2024年6/17に上海国際映画祭で上映された『郷 僕らの道しるべ』（23年）は、北京電影学院の監督科を卒業した伊地知拓郎監督と、同じく北京電影学院卒業した、女優兼プロデューサーである小川夏果さんによる鮮烈な問題提起作だった。

それに対して本作は、1948年に中国の黒竜江省に生まれ、日本大学芸術学部映画学科を卒業した後、中国で映画制作に携わってきた彭偉（ポン・ウェイ）の監督デビュー作だが、珍しいのは、本作が日中共同制作であることだ。したがって、本作のパンフレットの末尾には、中国側と日本側双方の制作スタッフやプロジェクトサポーター等の名前がずらりと

並んでいる。もちろん、日本大学芸術学部は日本側の「協力」者の筆頭だ。

ちなみに、1/7に「張芸謀 艶やかなる紅の世界」で見た『菊豆』(90年)も、当時としては珍しく徳間書房を中心とする日中共同制作だったが、日中関係が厳しさを増している昨今、本作のような形で日中共同制作とされる映画は珍しい。本作でそれが実現できたのは、ポン・ウェイ監督が日本大学の芸術学部映画学科を卒業したためだろうが、本作の完成に至るまでの彼の人脈形成は？

■□■タイトルの意味は？本作のテーマは家族！■□■

本作の原題は『夏來冬往』。他方、英題は『Hope for A New Life』だから、完全に異訳だが、邦題は原題と全く同じで『夏が来て、冬が往く』とされている。しかし、それって当たり前なことでは？とりわけ、地球温暖化の影響を受けて、日本では近時豊かな四季のうち春と秋が極端に短くなり、事実上、夏と冬の“二季”になってしまっているから、「夏が来て冬が来る」のはよけいに当たり前だ。

それはともかく、本作のテーマは“家族”。そう聞くと、私たち世代は山田洋次監督の『学校』シリーズ(93年~00年)のイメージが強いが、本作のテーマを家族にしたのは、3年前に母親を亡くしたポン・ウェイ監督が、家族愛を描く映画を作りたいと思ったからだ。最初は主人公が回想するシーンの「養父と娘の話」だけだったが、それだけでは肉付けが足りないと感じ、実際に報道された3件のニュースを組み合わせてプロットを書き、構成した結果、本作が完成したらしい。したがって、「親が子を育て、暮らしを営む。その子が新たに生まれた子を育て、世代が移っていく。それはまるで四季のように。夏が来て冬が来る。冬が去るとやがてまた夏が来る」という当たり前のことを当たり前のようにスクリーン上に表現することが、ポン・ウェイ監督の狙いだが、その成否は？

■□■鄭家の家族たちは？佳妮と曉莉は今なぜ実家に？■□■

女性が結婚する場合、男に望む条件は地位？金？それと容貌？もちろん、その三拍子が揃っているのが理想だが、昨今の中国ではさらに「家の所有」が加わっているらしいから、男は大変だ。本作冒頭、広東省に住む女性・佳妮(ジャーニー)(シュエ・ウエン)が恋人の志遠(ジューエン)(スン・シューポー)との結婚に踏み切れない理由が、「まだ自分たちには持ち家がないこと」だとわかると、なるほど、なるほど……。私は「そんなことにこだわる必要はない」というジューエンの言葉の方に説得力を感じるのだが、ジャーニーは全くそれを聞く耳を持たないようだ。

そんな印象的な冒頭シーンに続いて、スクリーン上の舞台が広東省から山東省の青島に移り、「行き別れになっていた実父が亡くなった」との知らせを受けたジャーニーが葬儀に参列するため実家を訪れるシークエンスになる。そこで出会ったのが、同じく葬儀に参列するため深圳から実家に戻ってきた姉(次女)の曉莉(シャオリイ)(チェン・ハオミン)だ。ところが、揃って実家の門をくぐろうとした2人は、鄭家のただ一人の男である弟・文龍(ウエンロン)(ワン・チー)からいきなり水をかけられた上、「家に入るな！」と怒

鳴られてしまったから、ビックリ。一体どうなっているの？ジャーニーとシャオリーは姪の小雨（シャオユー）（ムー・ウェンシュエン）に連れられて、実家のすぐ近くに住んでいる長女の文鳳（ウェンフォン）（ゼン・ユンジェン）の家に入りやっとなり落ちていたが・・・。

私が数回訪れたことのある青島は、青い海と青い空が美しい風光明媚な海浜都市。青島ビールでも有名だ。そんな青島を、私は近代的な地方都市で、地価も相当高い人気スポットと思っていたが、本作を見ていると、鄭家の住む山の上の地域は、古い因習が山ほどあるらしい。「家を出た娘が家に入るには、一度別家へ行ってからでないとダメ」というのもこの地域の因習で、それをジャーニーに教えてくれたのはシャオリーだ。あれこれと続く父親の葬儀の間に、ジャーニーが、母親の藩三喜（パン・サンシー）（ワン・ヤージュン）や長女のウェンフォン、次女のシャオリー、姪のシャオユーらと、家族のこと、父母のことなどの話を重ねるうちに、ジャーニーもシャオリーも、なぜ自分たちが養女に出されたのかについて、様々な情報を得ることになったが、さてその真相は・・・？

■□■産めよ殖やせよ（日本）VS 一人っ子政策（中国）■□■

あなたは「一姫二太郎」の意味を知ってる？これは時として、「女兒一人と男児二人が良い」と解釈されているが、それは誤り。正しくは、「第一子は女兒、第二子は男児が良い」という意味だ。また、あなたが昭和生まれの日本人なら、「産めよ殖やせよ」のスローガン（国策標語）を知っているはずだ。Wikipediaによると、これは、軍国主義化を進めていた当時の日本政府の厚生省が、1939年にナチス・ドイツの「配偶者選択 10 カ条」に倣って発表した「結婚十訓」の第 10 条「生めよ育てよ国の為」を語源としたものだ。その後、1941年に、近衛文麿内閣は「人口政策確立要綱」を閣議決定した。この人口政策確立要綱は、当時 7300 万人だった日本帝国の軍国主義を支えるため、1950年における内地総人口 1 億人を目標し、初婚年齢を 3 歳引き下げて男性 25 歳、女性 21 歳とする人口増強策の提示と、国の理想である「一家庭に子供 5 人」を実現するために独身税、婚資貸付検討を含め国民への上からの呼びかけたものだ。「産児報国」「結婚報国」などもスローガンとした「人口政策確立要綱」は、総力戦に必要な人的資源を確保するための人口政策となった。

他方、あなたは、1949年 10 月 1 日の新中国建国以降の爆発的な人口増に対処するため、1979年から始まった「一人っ子政策」を知っているはずだ。この一人っ子政策は、第 1 期（1979～1984 年）、第 2 期（1984～1985 年）、第 3 期（1986～1987 年）、第 4 期（1987 年以降）にわたって推進された。しかし、「小皇帝」（女兒の場合は「小皇后」）の言葉まで生まれた一人っ子政策のさまざまな問題点が指摘される中、2013 年には、「夫婦どちらかが一人っ子ならば、第 2 子の出産を認める」という緩和策に踏み切り、さらに 2015 年 12 月 27 日の常務委員会で、すべての夫婦が 2 人の子供を持つことを認める「人口・計画出産法」の改正案を採択し、2016 年 1 月 1 日から施行したことによって一人っ子政策は廃止された。

■□■女の子は養女に！一人っ子政策が男尊女卑思想を助長！■□■

明治維新によって、アジアで最初に封建国家から近代国家への転換を成し遂げた日本は、以降、急速に近代化と軍事化を進めたが、国力増強の要（かなめ）は人口増にあった。日清、日露の戦いに勝利するに至った日本の、「世界に類を見ない」特徴は、司馬遼太郎の小説『坂の上の雲』（68年～72年）に書かれているとおりだが、理想を夢見て、坂の上の雲に向かってひたすら歩いていく当時の若者の姿は、平成生まれの若者たちには到底想像できないものだろう。日中戦争の拡大と対米英戦争への突入は、誰かが、どこかで歯車の回転を間違えたまま、結局、集団無責任体制の中でどうにも修正が効かないまま、原爆投下、無条件降伏まで進んでしまったとしか言いようがないが、太平洋戦争の時代も「産めよ殖やせよ」のスローガンどおり、人口は増え続けていた。そして、私が生まれた戦後の昭和24年（1949年）は、後に「団塊の世代」と呼ばれるベビーブームとなった。ちなみに、日本の現在の毎年の出産数は80万人を切っているから、その落差はすごい。

そんな日本に対して、爆発的な人口増を抑えるべく、1979年から中国が採用した「一人っ子政策」の功罪は？また、この「一人っ子政策」を2015年に廃止したことの功罪と、そのことによる社会的影響は？20世紀後半から先進国は“ウーマンリブ”の時代に入っているが、日本でも中国でもそして韓国でも、アジアの国は昔から男尊女卑の思想が強い。そのため、男尊女卑の思想と「一人っ子政策」が結びついた中国では、一人目に女の子が生まれた場合、歓迎されないままその女の子を養女に出し、次の男の子の誕生を期待するというケースが生まれたらしい。なるほど、なるほど。すると、本作にみるジャーニーもシャオリーもそれ・・・？

■□■子供時代のジャーニーの苦悩は？養女は秘密？それとも？■□■

前述のように第一子の女の子が養女に出されるのは、“一人っ子政策”の歪みによるものだが、そうだからといって、必ずしも養女に出された女の子が不幸になると決まっているわけではない。つまり、さまざまな事情によって子どもを授かることができなかった夫婦が、養女を迎えたことを喜び、養女を心から可愛がれば、実の親子以上に幸せな養親子関係が築けることは容易に考えられる。

本作中盤からは、鄭家の父親の葬儀のために青島の実家に集まった鄭家の3人の娘たち、すなわち長女のウェンフォン、次女のシャオリー、三女のジャーニーを中心とする家族間のさまざまな話し合いの中で、突然ジャーニーの回想シーンが登場するが、そこにおける子供時代のジャーニー（リウ・クワンイー）を見る限り、彼女は望み望まれた養親養女であることがわかる。もっとも、養親のリン・シャオバオ（ヤン・ハンビン）に妹のチアシェエ（シー・リユー）ができると、ジャーニーの目には、「なぜ父親は、妹ばかり大切にしているの！？」と映ったようだから、子育ては難しい。私の中学時代を振り返って考えても、「なぜ兄ばかり大切にしているの？」「成績のいい兄は可愛く、成績の悪い弟はどうでもいいと思っているの？」と真剣に考え悩んだことや、それを動機として家出しようと考えたことなど

を思い出すが、小学生の女の子であるジャーニーが、リュックを背負って家出する風景はかなり異常だ。もちろん、養女のジャーニーと、後からできた妹のチアシュエを差別せず、2人とも平等に可愛がっていると自負している父親のリン・シャオバオは、ジャーニーを探すために慌てて車で飛び出したが、その後の展開は？

このストーリーこそが、ポン・ウェイ監督が家族を描くために本作の構想として思いついた、主人公が回想するシーンの養父と娘の話であることが明らかだが、なるほどジャーニーの心の中には、そんな感情が根強く残っていたわけだ。そして、それはもちろんジャーニーより先に養女に出されたシャオリーも、また長女として生まれながら、そのまま鄭家の女の子として実家で育ったウェンフォンも、それぞれ両親や家族に対して、さまざまな経験とさまざまな思いを持っていたわけだ。ポン・ウェイ監督は、1984年生まれの若手監督だが、最初の監督作品のテーマに“家族”を選んだだけあって、実に見事に3人の娘たちの気持ちをスクリーン上に演出しているのだから、それに注目！

■□■女の子一人だけの長女・鄭文鳳にもこんな試練が！■□■

家族をテーマにした本作の主人公は養女に出された三女のジャーニーだが、同じく養女に出された次女のシャオリーも、そして長女ながら一人だけ鄭家に残り、夫との間に生まれた一人娘・シャオユを育てている長女チョン・ウェンフォンも、それぞれ女であるがためのさまざまな試練を受けていることがよくわかる。三人姉妹の中で、一番楽観的なのはシャオリーで、長女のウェンフォンはとにかく我慢強い性格のようだ。スクリーン上にはそんなウェンフォンの夫の姿が登場しないので不思議に思っていると、ジャーニーとシャオリーの滞在中に戻ってきたウェンフォンの夫は、手元に男児を抱いていたからアレレ、アレレ……。これは一体誰の子？ひょっとして、夫はこの不倫の男の子をウェンフォンに「育てろ」と要求しているの？そんなバカな！今の日本の若い女の子なら即座にそう叫ぶだろうが、さてウェンフォンは？

■□■葬儀を連絡した母親の真意は？弟には深刻な事情が！■□■

本作を鑑賞する観客は、ウェンフォン、シャオリー、ジャーニーの弟であり、今ではすっかり鄭家の「跡とり息子」として周囲からも認知されているウェンロンが、父親の葬儀に参列するべく、わざわざ広東省と深圳から青島の実家に戻ってきたジャーニーとシャオリーに、水をかけて「家に入るな！」と叫ぶシーンや、滞在中の2人に対して「早く出て行け！」と叫ぶ姿、さらにはジャーニーが母親から受け取ったネックレスを「返せ！」「鄭家からお前にやるものは何もない！」と言い放つ姿は、いかに男尊女卑の思想が強い地域であっても、「あまりにもひどい！」と思うはずだ。もちろん、ジャーニーもシャオリーも、ウェンロンが鄭家のただ1人の男として、家系も財産も全て承継することに異を唱えるものではなく、それは、これまで何の教育も受けられず、ただ鄭家の家事労働者としての役割だけを果たしてきたウェンフォンも同じだ。それにしても、本作に見るウェンロンの態

度のデカさ（悪さ？）は群を抜いており、常識外れだ。

母親のパン・サンシーもそんなウェンロンのわがままのし放題を放任していたが、父親の葬儀をすべて終え、いよいよ明日はジャーニーもシャオリーも青島から離れることが決まると、そこで母親が、泣きながら 2 人に“腎臓の移植”を訴えたので、その姿にビックリ！その詳細は、あなた自身の目で確認してもらいたいが、鄭家に生まれたただ 1 人の男としてわがまま放題に育ったウェンロンには、腎臓移植が必要という大変な事情があったらしい。もちろん、それについては誰の腎臓でも OK というわけではなく、適合する腎臓が必要だが、多くの場合、それは家族の腎臓ということになる。すると、母親が父親の葬儀への参列を、これまで一度も連絡をしたことのなかった 2 人の娘（養女）に連絡したのは、その目的のため・・・？そんなバカな・・・？

■□ラストの舞台は再び広東省に。2 人が出ず結論は？■□

もちろん、そんな秘密は、ウェンロンと母親、ウェンフォンとの間の“絶対的な秘密”だったが、ウェンロンの「絶対に喋るな！」の言葉を見捨て、母親が今、シャオリーにそれをあえて語り、腎臓の移植を懇願したのは一体なぜ？やっぱり、母親にとっては、鄭家の跡取り息子ウェンロンの命がそれほどまでに大切な？逆に言うと、一度養女に出してしまった 2 人の娘の命の価値は低く、今でも命の危険を投げ打って、ウェンロンのために自分の腎臓を提供すべきなの？そんな重大な問いかけに対して、部外者たる観客が安易に答えを出せるものではないが、当事者たるジャーニーとシャオリーの受け止め方は？

本作ラストの舞台は再び広東省に。何一つ連絡のないまま青島から戻ってきたジャーニーをジーユエンが迎えることになるのだが、そこで交わされる“恋人同士”の 2 人の会話とは？そんなハッピーエンド（？）の是非（？）を含めて、いろいろと考えさせられる家族の物語を提供してくれたポン・ウェイ監督に感謝！

2025（令和 7）年 1 月 9 日記